七　婚活イベント会場にて

　沈黙の時間だけが過ぎ去っていく。テーブルの向かい側には女性が座っている。一通り、自己紹介をした後には、話す内容がない。話が広がらない。たかだか、十五分のフリータイムだが、沈黙だけが続くとこんなにも長く感じられるのか。普段、仕事をしている時などは、あっという間に、一時間、半日、一日が過ぎてしまうのに。
　安藤は初めて婚活イベントに参加した。普段は、ほとんどが男性の職場で、若い女性と話す機会はない。女性と会話すると言えば、庶務のおばちゃんか、母親ぐらいだ。だから、何を話題に話をしていいのか、よくわからないのだ。普段の通り、ありのままの姿で接してください、と冒頭で司会者が説明していたが、普段の通りだと、ほとんどパソコンに向かって仕事をしているので、黙っているしかない。だが、ここは婚活イベント会場だ。相手の気を惹く様な洒落た事を言おうとすると、よけいにプレッシャーがかかり、何も言えなくなってしまう。そして、沈黙が続く。

「この人、一体、何を考えているんだろう？」
　有紀子は俯いていた。母親に勧められて、婚活イベントに参加した。職場は病院。看護師である。ほとんどが女性である。日勤、遅出、夜勤の交代制勤務で、一般の人と知り合うことは少ない。それを心配して、母親が申し込んだのだ。有紀子にとっては、あまり気乗りはしなかったのだが、どうせ、家にいても暇なので、こうして参加したのだった。
　婚活イベントは、最初は、司会者の進行と場違いな武士の姿のスタッフがいたことで、盛り上がったものの、いざ、一対一で見知らぬ男性と面と向かうと言葉が出てこない。入院中の患者さんは、ほとんどが高齢者なので、異性として意識することもなく、たまには軽口も出るのだが、こういう場では何を話題にしていいのかわからない。相手も自分と同様なのか、言葉が出てこない。会話が発展しない。そして、沈黙が続く。

「さあ、お願いするよ」
　落武者姿の宮本が、ピンクの前掛けをして立っている。宮本は自分の体から矢を抜いた。矢を放つ。矢は向かい合いながらも、俯いている多くの男女の頭の上を通り過ぎた。

　あれっ。今、頭の上を何かが通り過ぎたぞ。と、同時に、胸の中のつかえが一気に取れたような気がする。
「今、何か、頭の上を通り過ぎませんでしたか」安藤は、つい、あるがままに口を開いた。
「そう言えば、そうですね」有紀子は顔を上げた。
「なんだか、すっきりしましたね」安藤の顔に笑みが戻った。
「そうですね」有紀子も微笑み返しをする。
「すっきりすると言えば、僕、マラソンをするんです。走った後は、汗を掻きますが、シャワーを浴びるとすっきりするんです。有紀子さんは、何かスポーツをするんですか？」

「私は、高校までバスケットボールをしていました。でも、今は、少し太っちゃって」照れたように俯く有紀子。
　安藤の目から見て、確かに、有紀子は少しぽっちゃりしていた。でも、自分がやせているから、体がガリガリよりは、太っている方が安藤にとっては好みのタイプだ。人は自分にないものを他人に求めるものなのだ。自分にないものと相手にあるものを組み合わせると、つまり、凹と凸を組み合わせるときれいな□になる。
「今度、一緒に、大会に出てみませんか」
「ええ。マラソン大会ですか。もう、運動はしていないし・・・」
「いや。最近は、フルマラソンやハーフマラソンだけでなく、三キロや五キロなどの初心者向けのコースもあるんですよ。走り終わった後は、そうめんやうどん、おそばなど、地元の特産品が食べられるし、温泉にも入れるんですよ。ちょっとした小旅行ですよ。単に、旅行するよりは、目的があったほうが楽しいですよ。最初は、雰囲気を楽しむために、応援からでも行ってみませんか」
「それだったら、行ってもいいですよ」
　さっきまでの沈黙が嘘のように、会話が続く。不思議な気がするけど、会話って、こんなものだろう。自分を飾らず、ありのままの姿で話をすればいいんだ。安藤と有紀子は席を離れ、ホテルのテラスに場所を移し、次のマラソン大会の計画を立て始めた。

　あれほど静かだった会場が急に賑やかになった。それぞれがカップルになり、会場の各場所で楽しそうに話をしている。
「十五分が経過しましたけど、どうしましょう。次の組に交代しましょうか？」
　司会者の藤原さんが坂本に近づいて来た。
「まだ、いいんじゃないんですか。このままもう少し様子を見ましょう」
　折角、各人が盛り上がっているのに、ここでカップルを引き離せば、ブーイングの嵐だ。冷水をかけるようなものだ。坂本はそう判断した。
「宮本さん。ありがとう。宮本さんのおかげですよ」
　坂本は部屋の片隅に立っている宮本に笑顔で振り返る。宮本は先程放った矢を握り締めていた。
「いやあ。私のおかげじゃないですござる。私の体に突き刺さった、この矢のおかげでござる。多分、今まで、人を苦しめたり、困らせたりしてきたので、矢として、人に恩返しをしたくなったのでござろう」と言いながらも、宮本としてはまんざらでもなさそうだ。矢を愛しそうに撫でている。落武者にも愛がある。いや、落武者だからこそ、辛い経験があったからこそ、他人にやさしくできるのかもしれない。盛況のうちに、婚活イベントは終わりを告げた。
　カップルたちは、雨が降っていないのに傘をさし、相合傘になったり、互いに見つめ合いながら、ひとつのオレンジジュースを二人で飲んだりと、様々だ。みんな笑顔で会場から出ていった。矢の効果はまだ続いているようだ。
「お疲れさまでした」
　司会者の藤原が去った。後に残ったのは、坂本と宮本の二人。

「さあ、僕たちも片づけを終えて、帰りましょう」
「帰るでござる」
　こうして坂本が企画した婚活イベントは大成功に終わった。全員がカップルになったのだ。カップル率百パーセント。心配していた矢の効果だが、仲が良くなるきっかけ作りに貢献したようで、それ以降は、本人たちの意向の下で、ほとんどのカップルは関係が続いた。この成功が口コミで広がり、坂本が企画する婚活イベントは人気を呼び、定員がすぐに一杯になった。
「大変、申し訳ありません。定員オーバーとなり、締めきったんです」と電話で頭を下げながら断ると、「じゃあ、次はいつ開催されるんですか。日程が決まっていなくても、次回のパーティーを予約させてください」と懇願された。こうして、婚活パーティーは次回、次々回も定員は一杯となった。
「宮本君。婚活イベントの開催をもっと回数を増やせられないの。あなたのおかげで、パーティーはいつも満員で、もう既に、何十組ものカップルが結婚に至っているのよ。おかげで、結婚式場や二次会、三次会用パーティー、家具店、家電販売店、不動産会社、旅行代理店、はては産婦人科や幼稚園、ピアノや英会話教室、学習塾まで、幅広い分野から、この婚活パーティーに協賛したいと、依頼が殺到しているのよ。ホント、断るのが大変なんだから」と編集長は嬉しい悲鳴を上げている。
　編集長としては、経営者の視点で、この機械を逃さず捉えて、経営を安定させるとともに、事業を拡大させたい意向があるのだ。
「はあ。もっと回数を増やせと言われても、毎月、開催していますし・・・」
「それを二週間に一回とかにできないの？部下を増やしてもいいわよ。このままじゃ、参加者にしろ、協賛者にしろ、お客さんを逃がしてしまうわ。他の会社も、サンタクロースの着ぐるみがプレゼントを配ったり、お相撲さんの着ぐるみが塩の代わりに砂糖を巻くなど、奇抜なアイデアで、うちに対抗してきているわ」
「家に帰って相談します」
「私以外に、誰と相談するの？」編集長の語気が荒くなる。
「相棒です」むっとしながら言い返す坂本。
「ああ。あの落武者のコスプレマニア？まあ、それはいいけど。もうそろそろ、あの人とも縁を切った方がいいんじゃないの。これから、大きくなっていくのに、いつまでも奇を衒って、落武者と婚活ではいけないんじゃないの。そろそろ王道に戻しましょう。それに相談相手は、落武者君じゃなくて、編集長の私よ。忙しいのはわかるけれど、今、会社の大転換の時期なの。この事業が上手くいけば、会社は安定するし、もっと他の企業とも連携できると思うの。ほら、見てごらんなさい。今まで、相手にもしなかった業種の、自動車販売会社やスポーツクラブ、保育所や病院なんかも、一緒にやりませんかと頭を下げていきているのよ。今がチャンスなのよ。何でも波があるの。今は大きな波が会社に押し寄せてきているの。この波に乗れるかどうかで、会社の行く末が決まるの。それに、あたしは婚活だけだと思っていないの。婚活という人と人を結びつけるノウハウで、この街の人を何らかの形で結びつけたいの。繋げたいの。それが、この街の発展につながるし、この街の人たちの幸せにつながると思うの。あたしも今まで、街の発展や街

の人々の幸せなんかよりも、この情報誌の売り上げをいかに伸ばそうとばかり考えてきたけど、この婚活イベントで考えが変わったわ。だってすごいじゃない。同じ街で住んでいながら、今まで、話したこともなかった人たちが、この婚活イベントで知り合いになれて、しかも、これからの人生を何十年も共に歩むパートナーになるなんて、まさに奇跡よ。あたしたちは、この奇跡の真っただ中にいて、奇跡のお手伝いをしているのよ。そのためにもあなたの力が必要なのよ。このまま、この事業が発展していけば、近いうちに、あなたは主任に昇格よ。給料だって、ボーナスだって上がるわ」

普段、お小言ばかりの鬼編集長が宮本の手を熱く握り締めた。

「はあ。とにかく、一日、考えさせてください」

「何日でも考えていいわ。いい返事を待っているわ」

鬼がにやりと笑った。それでなくても細い目がより細くなって、皺のように見えた。お多福だ。お多福に似ている。鬼と福は表裏一帯の関係なのか。坂本は編集長の話す内容よりも鬼とお多福が交互に変わる編集長の顔ばかり見ていた。

「ただいま」

「今日は、早かったでござるな」鎧にエプロン姿の宮本が台所に立っていた。見慣れた姿だけど、アンバランスのバランスがある。

「今晩のおかずは、サンマでござる。生きのいいサンマで美味しいとスーパーの店員が言っていたでござる」

宮本はすっかりこの世界になじんでいる。最初は、落武者コスプレは気味が悪い、危ない人じゃないかと近所の人からは避けられた。だが、その落武者姿を見て、いままでいた近所の変な人たちがいなくなってしまったのだ。そのことで、近所の人からは今では用心棒扱いされている。類は友を呼ぶと言うけれど、あまりにも強烈な個性だと、類も友だちにならずに、返って敬遠するらしい。

エプロン姿の宮本の背中に向かって、坂本が話をしだした。これまでの付き合いがあるから、宮本の顔をみながらでは編集長からの話を切り出せなかったのだ。

「宮本さん」

「なんでござるか。もう少ししたら、食事の準備が出来るでござる」宮本は最後の仕上げとばかりに、刀でねぎを刻み始めた。

「えいや」トトントントン。トトントントン。リズム感のある実に楽しそうにねぎを調理している。宮本は嫌なことでも、単純なことでも、何でも楽しくしてしまう術を持っている。坂本は改めて感心した。

「刀は武士の魂なのに、その魂でねぎなんか刻んでもいいの？」

坂本は率直に疑問を口にした。

「いやあ、おっしゃる通りでござる。これまでは、確かに、刀は武士の魂で、大義の下、人を切るためものと思っていたのでござるが、坂本殿と知り合って考えが変わったのでござる」

「どんなふうに？」坂本は宮本のねぎを刻む刀の刃先を見ていた。

「刀は人を切るためのものではなく、人を喜ばすために、人の悪の心を切るものでござる」

「それ、どういうこと？」坂本ははっと気付いた。
「つまり、常に腰に差した刀を意識することで、他人へのネタミや悪意、嫉妬心、優越心など、自分の心の中にある様々な悪の心を切り捨てるものでござる。人は、悲しいかな、他人と自分を比べざるを得ないのでござる。それはいたしかないものの、その心が湧いた瞬間、腰に挿してある刀を見ることによって、その慢心を切ることができるのでござる。そのことを、宮本殿とのつきあいで、初めてわかったのでござる。人を切るのではなく、他人を陥れようとする自分の心を切るのでござる。さあ、できたでござる」
　その言葉は、坂本の編集長に認められ、昇格したいという気持ちを、給料を少しでも多く貰いたいという気持ちを、一刀両断で切り捨てた。
「そうだね。そうだよね」
　坂本は同じ言葉を繰り返しながら、「そんなにガツガツ食べると健康によくないでござるよ」という宮本の忠告を聞きながら、宮本の作ったチャーハンとサンマの塩焼きとみそ汁を無我夢中で食べた。